

編集後記

『眞實心』第四十四集が出来上がりました。ここには、宗教講座五編と新入生対象の学長講話が収録されています。是非ご高覧ください。

令和四年は、波乱の年となりました。二月にロシアのウクライナ侵攻が始まり、今も戦争状態が続いています。力による現状変更や核の脅威を目の当たりにして、戦争と平和について改めて考えずにはいられません。第二回宗教講座「非戦・平等を生きた僧侶高木顕明 その願いへの呼応―私たちはどのような世界・国に生きたいと願うのか」(訓覇 浩氏)では、「非戦」と「平等」を願いぬき、大逆事件に倒れた僧侶高木顕明の生き様が紹介されました。そのお話の中で、私たちは力による侵攻は力で防ぐという考えを持ちがちですが、そうではなく上手に戦争を避けることを考えるのが重要と説いておられます。また、第一回宗教講座「戦争とジェンダーの関係から見る真の平和の意味」(長谷川 晋氏)では、単に戦争でないというだけではなく、あらゆる格差、貧困、差別が全て取り除かれ

た状態を「積極的平和」といい、これは究極の理想としながらも、このような新たな視点を取り入れることにより現実が違って見えてくると説かれました。これらのご講話は、一人ひとりが戦争と平和について真摯に考える機会となりました。

また、令和四年は、長引く新型コロナウイルスとどう向き合うかを考えさせられる年でもありました。過去に経験したことのないこのパンデミックは、対面での絆づくりを困難にした反面、オンラインの関係づくりを飛躍的に促進させました。そのように変化・複雑化する人間関係の中にあつて、人と人がつながる力に思いを馳せる年となりました。第四回宗教講座「コミュニティⅡ友達家族―こどもの居場所は大人の居場所にあつた」(近江阿梨耶氏・宮崎あかね氏)では、友達の存在が支えになるという柱から立ち上げた寶蓮寺での「Rainbow Kids Kyoto」の活動をお二人の対談により紹介されました。その中で、お寺が誰でもはいるコミュニティの場であり、子どもの居場所は大人の居場所でもあること、そして大人が子どもの心に戻れる場所があれば、大人が楽しく子育てできることをお話されました。近江氏は「(この活動の中で)今日のこの時間を一緒に共有できて、それがふわりっとどこかの記憶に残っていたらいいなと思います」と述べておられます。これは、素敵な考え方だと思えます。「人とつながった体験」は、人のあたたかさを信じ、

円滑な対人関係を営むためのエネルギーをくれると思うからです。さらに、第三回宗教講座「ともに生きる―市民活動の現場で見たこと―」（金治 宏氏）では、少数者に焦点を当てた共に生きる取り組みを3つ紹介されました。その中には本学のキャリア形成学科学生が取り組んだ世代間交流についても紹介されました。彼らの活動は、認知症の人やその家族と交流し、思いや希望を聴くことを通じて、学生自らの出番、役割を専門職と共に考えるという目的がありました。その交流を通じて、学生の一人である竹中さんは、認知症の人が介護や医療を受ける人ではなく、一人の人間として生きておられることに気づき、かつそのご家族から「心の老化がストップしました」という言葉を頂き、自分たちの活動がご家族に楽しい時間をもたらし、それが癒しとなることを報告されました。これに加えて、学長も「思いやり」「協調性」「やり抜く力」「社交性」「自制心」という非認知的能力の大切さを強調されています。人は人の和の中で生き、生かされています。この三年に及ぶパンデミックは、人と人がつながる力に困難と変化をもたらしましたが、人は様々な工夫をすることで多様な絆を構築してきました。これらのご講話は、人と人がつながる力の意味と大切さを実感させていただく機会となりました。

さて、ロシアのウクライナ侵攻と新型コロナウイルスによるパンデミックにより、あたりまえと

思っていたことが、実は人が努力して作り上げてきたものであることに気づかされました。第五回宗教講座「わたしたちと宗教」（林 研氏）では、社会的適応ができた人間関係が円滑で一見上手く生きている人でも、「自分とは何か」「人生の意味は」などのスピリチュアリティの問題を抱えていると、病や死の接近により自己が脅かされる事態ではそれが苦悩となつて浮かび上がる。そのとき、宗教は基本的に生きることの意味づけを行う機能を果たし、死が怖いのは当然だけれども、その感じをよりよく生きていくために利用していくこれが宗教の知恵であると説かれました。このご講話は、あたりまえが崩れた時、人がより良く生きるために宗教がはたす役割について多くの示唆に富むお話でした。

ここに収録されたいずれのご講話にも、混迷の今を生きるための智慧が詰まっています。自分を振り返る必要に迫られたとき、それらの生きる智慧は大きなヒントを与えてくれかもしれません。是非本書をお手元に置いて読み返していただければ幸いです。

最後になりましたが、ご講話を頂きました講師の先生方、そして動画撮影や編集などにご尽力いただきました教職員および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。